

Title	Steinbeck と East of Eden
Author(s)	伊豆, 大和
Citation	Osaka Literary Review. 9 p.156-p.177
Issue Date	1970-12-14
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25721
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Steinbeck と *East of Eden*

伊豆大和

〔序〕

1952年に出版された *East of Eden* は、その量に於いて *The Grapes of Wrath* を凌ぎ、Steinbeck の作品中最大のものである。1939年、大恐慌下にあったアメリカの社会矛盾を取り上げた小説 *The Grapes of Wrath* の発表によって社会に大きな反響を巻き起こし、世間の注目を集めた Steinbeck であったが、彼はその後10年余の間これに比肩しうる作品を書かなかった。そして、*East of Eden* は、彼がこうした10年余の沈滞状態を破らんとする大きな意気込みをもって取り組んだ野心作であり、それが出版された年1952年に彼が丁度50歳の年齢にあったことも全くの偶然とは考えられない。彼がこの作品にかけた意気込みは、彼自身の次のような言葉が明確に物語っている。

I think everything else I have written has been, in a sense, practice for this. . . . If *East of Eden* isn't good, then I have been wasting my time. It has in it everything I have been able to learn about my art or craft or profession in these years.¹

Steinbeck 自身のこのような言葉、さらには *East of Eden* の持つ深刻な内容、その雄大なスケール等から判断して、それは確かに彼にとってはいわば 'life work' とも言うべき作品であったと言えよう。

East of Eden はこのように Steinbeck が全力を傾注して世に問うた大作であったにも拘らず、反響は期待に反し世評は上がらなかった。この作品を論ずる批評家のほとんどは、これを失敗作と見なし軽視する傾向にある。² 例えば、W. French はこれを評して 'Patchwork Leviathan' と言い、³ また R. W. B. Lewis は 'jumbled tale' と呼んでいる。⁴ この二つのニッ

グネイムからも推測されるように、彼等はその内容と形式の不調和を指摘し文学作品としての弱点を鋭くついているのである。そして、*East of Eden* の評価は、“the kind of failure that captures interest and deserves respect and sympathy”⁵ とする F. W. Watt の至言をもってすでに定ったかに思われる。

East of Eden を純粋な意味で一個の独立した文学作品として眺めるならば、それは確かに形式上の統一を欠き、結果的に冗長で退屈なものであることは否定できない。しかしながら、これが *The Grapes of Wrath* の作家 Steinbeck の手によって生みだされたものであること、さらには彼自身のこの作品にかけた意気込みの大きさ等を考え合わせる時、それは単に失敗作として片づけられてよい作品であるとは思われない。この小論に於いては、*East of Eden* を Steinbeck ならびに彼の他の諸作品との関連においてとらえることにより、この作品の持つ意義がいかなるものであるかを考え、あわせて、それが「興味をひき、尊敬と同情に値する失敗作」に終わった原因を検討してみたい。

〔I〕 テーマとその展開

East of Eden 34章に於いて Steinbeck は “We have only one story. All novels, all poetry, are built on the never-ending contest in ourselves of good and evil.” と極言する。そして、この善と悪との相剋葛藤の歴史である人間の歴史の流れの中にその流れの一つのユニットとして存在する人間個人については次のように考える。

Humans are caught—in their lives, in their thought, in their hungers and ambitions, in their avarice and cruelty, and in their kindness and generosity too—in a net of good and evil.⁶

要するに、*East of Eden* の Steinbeck は、人間のあらゆる問題を善と悪という最も究極的な意味においてとらえようとするのである。では、この

善と悪の世界にあって、「善と悪の綱」に捕えられ、いわば ‘moral unit’⁷として存在する人間個人は、一体いかに生き、またいかにあるべきなのか。彼はここにこの作品のテーマを見いだしたのである。即ち、*East of Eden* は、Steinbeck がその20年以上にも渡る文学活動に於いて初めて人間の内面・人間倫理を問題にし、その探求を試みた作品なのである。

さて、この倫理探求という深刻なテーマ展開のための媒体として、*East of Eden* はその題名が暗示するように、「旧約聖書」を、特に創世記第4章の Cain と Abel の物語を下地に踏まえている。この作品にあって特異な役割を演じる中国人 Lee は、この兄弟殺しの物語について次のように語る。

I think this is the best-known story in the world because it is everybody's story. I think it is the symbol story of the human soul.... The greatest terror a child can have is that he is not loved, and rejection is the hell he fears. I think everyone in the world to a large or small extent has felt rejection. And with rejection comes anger, and with anger some kind of crime in revenge for the rejection, and with the crime guilt—and there is the story of mankind.

ところで、小説を書くに当たって、そこにアレゴリーというテクニクを持ち込むのは Steinbeck が好んで用いる手法の一つであり、いわば彼の常套手段である。例えば、*Tortilla Flat* は『アーサー王伝説』の一種のパロディーとして書かれたものであり、ストライキ小説 *In Dubious Battle* は *Paradise Lost* を、また *The Grapes of Wrath* は『旧約聖書』を、それぞれ下敷きにしてアレゴリカルに書かれている。もっとも、これらの作品にあってはアレゴリーの要素は極めて控え目であるのに対し、*East of Eden* では、S.Cooperman も指摘するように、アレゴリーが前面に強く出すぎており、それがこの作品を結果的に失敗作に終わらせ

ている一因でもある。が、とにかく、*East of Eden* は Cain と Abel の物語のアレゴリーとして書かれたのもであり、『旧約聖書』の解釈ではないということは銘記されねばならない。

East of Eden は、時間的には南北戦争から第一次大戦まで、空間的にはコネティカットからカリフォルニアまでのアメリカを舞台にとり、Trask 家という架空の家族が設定されて善悪葛藤のドラマが繰り広げられる一方、そこに Hamilton 家という Steinbeck 自身の母方の家族も登場し、両家の歴史が三世代に渡って語られるという雄大なスケールを持っている。そして、テーマを背負った Trask 家の人々の名前は、すべて、AあるいはCをイニシャルに持ち、Aをイニシャルとする Adam, Aron (Aron), Alice, Abra は ‘Abel characters’ として、またCをイニシャルにする Cyrus, Charles, Caleb (Cal), Cathy はそれぞれ ‘Cain characters’ として登場する。

さらに、Trask 家の物語には、作者 Steinbeck の代弁者として Lee という中国人が紹介される。Lee は Trask 家の召使いという形でドラマに参加しながらも、一種達観的とも言える境地に立って、‘moral unit’ としての人間の在り方についてしばしば哲学的意見を述べるという極めて特異な役割を演じている。彼は、Cathy の悪魔的な逃亡に「エデンの園」を築く夢破れ半ば放心状態にある主人 Adam を励まし、生まれた双子に「人間の魂を象徴する物語」である Cain と Abel の物語に因んで、Cal, Aron と命名するのである。

ところで、Cain と Abel の物語を調べていた Lee は一つの疑問を懐く。それは、創世記第4章第7節に当たる箇所、Abel を殺した Cain に向かって言う神の言葉が、King James Version では “Thou shalt rule over him [sin]” となっていて、罪の克服が「約束」を意味しているのに対し、American Standard Bible によると “Do thou rule over him” となっており、それが「命令」という形で表現されている点である。

しかし、このような偉大な人間の魂の神話に解釈上の混乱があろうはずがないと考える Lee はヘブライ語で書かれた聖書の原典に当たってみる。But the Hebrew word, the word *timshel* — ‘Thou mayest’ — that gives a choice. It might be the most important word in the world. That says the way is open. That throws it back on a man.¹⁰

原典によると、この第7節は‘*timshel*’となっており、それは“Thou mayest”を意味し、罪の回復が神の約束でも命令でもなく、人間の選択の問題であることを意味している。つまり、罪の償いは人間各自の良心に問いかげられ人間の自由意志に任されるべきものであると言うのである。

もっとも、このような Lee の、即ち Steinbeck の新しい聖書解釈に対して、ヘブライ語学者・神学者等から異論が出るのは当然である。例えば、myth の研究家である J. Fontenrose は、Steinbeck の解釈について、まず、‘*timshel*’ というヘブライ語の動詞形は‘*timshol*’の誤りであり、かつ、この‘*timshol*’ という単語は“Thou mayest”の意味を持たないと指摘する¹¹。恐らく彼の指摘は正しく、Steinbeck の解釈が間違っていることは確かであろう。しかし、最初にも述べたように、*East of Eden* は聖書解釈が目的ではなく、それはあくまでこの小説のテーマを展開していくための媒体物であるに過ぎないのであり、従って‘*timshel*’の解釈が学問的な意味で誤っていようともそれはさして重要な問題ではないと考えられる。

Cain と Abel の物語は愛情の拒否が犯罪を生み、その犯罪が罪を生むという人間性の原型を象徴する物語であり、人は確かに原罪を背負い、永遠に呪われた存在 Cain を祖型に持っている。がしかし、‘*timshel*’ という言葉が意味するように、人はたとえ悪の道に陥り罪を犯したとしても、その罪を自ら回復し善なる道を選択する権利を与えられ、またその能力を備えた存在なのである。Steinbeck は Lee の口を借りて以上のように述

べた後、*East of Eden* のクライマックスである第4部に於いて、20世紀のアメリカを背景に、新しい Cain と Abel の物語、即ち Cal と Aron の物語を展開させるのである。

Cal と Aron は成長するにつれて全ての面に渡って大きな相違を示す。ハンサムで心優しくあらゆる点で優等生である Aron が、父 Adam からはもとより誰からも愛され好かれるのに反し、‘dark-faced’ で ‘slit-eyed’ であり、少々ひねくれた性格の Cal には、常に暗い陰がつきまとい、耐えず Aron に対する引け目と嫉妬を覚えながら自己の内部に潜む悪の意識に苦しむ。“Where Aron was received, Cal was rebuffed for doing or saying exactly the same thing.”¹² 双児が17歳になった感謝祭の日、Cal は自力で稼いだ金1万5千ドルを父 Adam にプレゼントしようとするが、Adam はこれを拒否し、彼に Aron のような生き方を求める。ここに到って、うっせきしてきた Cal の嫉妬心は一挙に爆発し、彼は復讐の意味で、一家の秘密であり今は Kate と名を偽って売春婦となっている母 Cathy のもとへと Aron を強引に連れて行く。母の死を教えられ母を理想化してきた Aron は、彼女が素性卑しい女として生きている事実に耐えきれず、失望のあまり年齢を偽って第一次大戦へ志願出征してしまう。一方、息子 Aron の傷心する様を目のあたりにした Cathy も程なく自殺を遂げる。やがて、Aron 戦死のニュースが Trask 家に伝えられ、Adam は落胆のあまり脳出血で倒れる。間接的ながらも弟 Aron を死へ追いやり、父 Adam を死の床に就かせた Cal は、自分の行為の卑劣さに自らを恥じ罪の意識に苦しむ。こんな Cal を Lee は臨終の床にある Adam のもとへと促し罪の許しを請う。苦しい息の下からもらされた Adam の言葉は “*Timshel!*” であった。

以上が Cal と Aron の物語のあらましである。もし人がこの闘争の絶え間ない人間社会にあって、ただ善の存在のみを信じ善のみを追求しようとすれば、彼は Abelのごとく、また Aronのごとく死に絶えて子孫を残

すことはできないであろう。かと言って、Cathy のように善の存在を一切認めようとせず、ただ悪の存在しか眼に入らぬ人間も又自らその身を滅ぼしてしまうであろう。‘*timshe!*’ に新たな解釈を施し、原罪のメカニズムからの人間解放を試み、現代に於ける ‘moral unit’ としての人間の在り方を追求した Steinbeck の解答は、善と悪とを認識しその葛藤に苦しむ人間 Cal である。「善と悪の綱」に捕えられてもて遊ばれながら、なおも人間としての道、即ち善なる道を求めようとする Cal こそが、善を選ぶ権利と生きのびる能力とを備えた存在なのであり、Steinbeck はそこに現代に生きる人間の救いを求めるのである。

〔Ⅱ〕虚構と実話

East of Eden は倫理探求というテーマを掲げた Steinbeck の野心作であり大作であることに間違いはないが、これを偉大な作品と呼ぶにはためらいがある。ここでは、それが失敗作であると言われる原因を主としてその構造面から考えてみる。

East of Eden が成功しえなかった根本的な理由は、結論的に言えば、フィクションとノンフィクションの不調和な取り合わせにある。つまりテーマ展開のために設定された Trask 家という仮空の家族の物語と Steinbeck 自身の母方の家族である Hamilton 家の歴史とが、混入され並列的に語られていることに原因している。前者がコネティカットを舞台に始められるのに対し、後者はカリフォルニアに展開されるというように、この二つの物語は最初から全く別個に出発する。もっとも、第2部に入り、Adam と Cathy がカリフォルニアに移住して来ることにより、両家は空間的には近づくことになる訳であるが、全編を通して、二つの物語の間には有機的なつながりはほとんど認められないのである。

では Steinbeck は何故に Hamilton 家の歴史を一種の「サーガ」のごとくこの小説の中に盛り込んだのであろうか。この問題の鍵は *East of*

Eden の成立過程にある。Steinbeck の実証的な研究家である P. Lisca によると¹³ *East of Eden* の原形はもともと “Salinas Valley” というタイトルで、彼の祖先がアイルランドからアメリカに移住して来た後の記録を彼の二人の息子 Tom と John に物語の形で残すために書かれたものであった。彼はこの本の準備を1947年に始め、1949年の3月頃までは “Salinas Valley” を書くつもりでいたようであり、題名が “East of Eden” となって新たなテーマが明確に認められるのは1951年に入ってからのことである。¹⁴つまり “Salinas Valley” が Steinbeck 自身の心境の変化によって “East of Eden” へと移行し、そこに新たに biblical なテーマが展開されることになった訳である。が、この作品は依然としてその原形を留めフィクションとノンフィクションの混入・並列という結果をもたらしたのである。実際、*East of Eden* はその原形 “Salinas Valley” を色濃く残してはいるものの、題名が *East of Eden* に移行した以上、そのメインテーマは、前述のごとく、あくまで人間性探求であらねばならない。この点に留意したと考えられる Steinbeck は、ストーリーを進めていくに従って意識的に Hamilton 家の物語を縮小させていく一方、テーマを背負った Trask 家の物語に重点を絞ろうと努めている。その証拠に、第1部では ‘narrative’ な調子で詳細に語られる Hamilton 家の物語は、第2部、第3部と進むにつれて次第に ‘episodic’ で断片的なものとなり、第4部に到っては Hamilton 家の人々はほとんど姿を消してしまうのである。

さてそれならば、*East of Eden* のテーマ展開のためにはむしろ障害物とも言える Hamilton 家の歴史を Steinbeck は何故に完全に削除してしまわなかったのかという疑問が当然生じてくる。そして、この問題を考えるには、彼の創作手法を考慮する必要がある。P. Lisca も指摘するように、¹⁵一つの作品を書くに当って、いくつかの短いエピソードを連ね、その結果一つの長い物語に仕上げていくという創作方法は、Steinbeck がよく

用いるテクニクである。例えば、*The Pastures of Heaven*, *Tortilla Flat*, *The Grapes of Wrath*, *The Red Pony*, *Cannery Row* 等すべて ‘episodic structure’ を持っている。そして、このテクニクが最も成功した例としてはやはり *The Grapes of Wrath* が挙げられよう。そこでは、彼は “narrative-chapters” に於いて Joad 一家の人々を描いていく一方その間に “inter-chapters” という短い章を挿入し、Joad 一家の置かれているシチュエーションを写し出し、丁度 Dos Passos の “Camera eye” 的な効果を試みている。彼はこの “inter-chapters” の中に Joad 一家の行動が展開されていく30年代後半当時の社会状況を手際よく盛り込むことにより、*The Grapes of Wrath* という小説に社会的・歴史的意義と背景を与えることに成功しているのである。

そして、*East of Eden* についてもこれと同じことが言えるのではなからうか。即ちそこに Hamilton 家の歴史が ‘episodic’ につづられている意味は、Trask 家の物語といういわば20世紀の神話に、歴史的・社会的背景を与え現実味を持たせることにあると推測されるのである。¹⁶ だとすると、どうしてこのテクニクが *East of Eden* では実を結ばなかったのだろうか。それは、“inter-chapters” の役割を作者自身の母方の家族の歴史という事実求めたことに原因すると考えられる。つまり、主役である虚構の Trask 家の物語よりも、本来脇役であるべき実話の Hamilton 家をめぐるエピソードの方がはるかに生彩に富み興味ある物語になっているという皮肉な結果を招いているのである。一例として、Steinbeck が Hamilton 家の四女であり彼自身にとっては母にあたる Olive の姿を多分にユーモラスに回想する箇所を一部紹介してみよう。

When I recovered from my pneumonia it came time for me to learn to walk again. I had been nine weeks in bed, and the muscles had gone lax and the laziness of recovery had set in. When I was helped up, every nerve cried, and the wound in my

side, which had been opened to drain the pus from the pleural cavity, pained horribly. I fell back in bed, crying, "I can't do it! I can't get up!"

Olive fixed me with her terrible eye, "Get up!" she said. "Your father has worked all day and sat up all night. He has gone into debt for you. Now get up!"

And I got up.¹⁷

これは彼が16歳の時の母 Olive をめぐるエピソードの一部であるが、そこに描かれる厳格な母 Olive は、彼の他の小説にしばしば登場する、激しい気性ながらも心温くヴァイタリティーに富んだヒロイン、例えば *To a God Unknown* の Rama, *The Grapes of Wrath* の Ma Joad 等を思い起こさせる。

この Olive のエピソードを初めとして、回想的にかつ詳細に語られる Hamilton 家の家庭、その8人の子供達の描写は確かに生気に満ちている。が、そのことが *East of Eden* という作品全体から見れば、皮肉なことに肝心の Trask 家の物語をより貧弱により作り物らしくしているのである。Hamilton 家の人々と比較すると、あらかじめ善玉・悪玉にタイプ分けされた Trask 家の人々は具体的な個々の人間というよりも、むしろ抽象物の集合といった印象を与えることは否定できない。さらに、そこに語られている善と悪とは極めて観念的・通俗的な意味に於いてのそれであり、善悪についてより深い追求がおろそかにされているの非難を免れえない。¹⁸

そして、Steinbeck のこうした善と悪との観念的な把握が最も失敗的に表われているのは、悪の具現者として登場する Cathy に於いてである。彼は Cathy を次のように紹介する。

It is my belief that Cathy Ames was born with the tendencies, or

lack of them, which drove and forced her all of life. Some balance wheel was misweighted, some gear out of ratio. She was not like other people, never was from birth.¹⁹

つまり、彼女は良心とか誠意とかおよそ人間を人間たらしめているものを一切持たない存在、“mental monster”²⁰として登場するのである。彼女はあらゆる人間は本質的に全て悪であり、ただ表面的に善の仮面を被った偽善者に過ぎないと考え、出くわす人間を次々と悪の道へ引きずり込もうとする。ところが、このように「怪物」ぶりを発揮して悪事を重ねていく Cathy であるが、その動機は必ずしも明らかではない。つまり、彼女は、ただ悪のために悪を働く「怪物」に終始するのである。だとすると、この「怪物」である彼女が自分の息子 Aron の傷心ぶりに心痛め、巨額の財産を彼に相続させる旨の遺書を残して自殺を遂げるという極めて「人間的」な最後は何とも不可解である。もっとも、彼女の自殺という行為は悪の自然消滅を象徴しているのであろうけれども、それまでの彼女を知る読者を納得させる最期とは言えず、この意味において、F. W. Watt が “Cathy is a creature of melodrama”²¹と言っているのは当然であろう。

Cathy の描き方に最も典型的に見られるように、Trask 家の物語展開には必然性に欠ける点が少なくなく、それは自然な “dramatic developments” というよりも作者の意図が先走った “arrangements”²² という印象を与えるのである。そして、この物語に現実味を添えるべき Hamilton 家の物語が、その意図に反して、逆にこうした欠陥をより一層目立たせるという皮肉な結果を生んでいるのである。

〔Ⅲ〕 *East of Eden* の背景

1939年発表の *The Grapes of Wrath* によって社会問題に対する強い関心を示した Steinbeck が、その後10年余りの間どのようなプロセスを経て1952年には全く異質の作品 *East of Eden* にたどり着いたのであ

ろうか。これは *East of Eden* を理解する上で、極めて興味深い問題であると考えられる。従って、ここでは、この間の Steinbeck と彼の主な作品とをごく大ざっぱに概観することにより、*East of Eden* の書かれた背景をさぐってみることにする。

1930年代は周知のごとくアメリカ全土が大恐慌の嵐にもまれ社会矛盾が随所に様々な形をとって暴露された時代であり、誰もが多かれ少なかれ社会問題に眼を向けざるをえない時代であった。この時にあたり、それまでキャリフォルニアの美しい自然を背景にむしろヒューモラスでリリカルな作品を書いてきた Steinbeck も、とうとうその厳しい社会現実からの逃避は許されず、多くの他の30年代の作家達と同様現実の問題に眼を開き、*In Dubious Battle*, *The Grapes of Wrath* という当時の社会問題を扱った二つの作品を生み出したのである。しかしながら、この二つの作品を通してうかがえる Steinbeck の基本的な態度は、結局のところ、*In Dubious Battle* の医者 Burton に代表される“watch and waiting”の態度であった。“...I want to see the whole picture—as nearly as I can. I don't want to put on the blinders of 'good' and 'bad' and limit my vision.”²³ と Burton が言うように、Steinbeck はその厳しい現実を政治的経済的偏見を一切抜きにして、できる限りあるがままに見ることに終始している。もっとも、*The Grapes of Wrath* にはその題名通り社会不正に対する怒りがある。だが、その怒りは悲惨な生活を余儀なく強いられている移住労働者“Okies”に対する極めて素朴な同情心から発せられた怒りであり、“All that lives is holy”²⁴ という Jim Casy の言葉に集約されるように、「人命を何よりも‘holy’なもの」とするごく人間的な考えに根ざしたものである。しかも、彼はこの種の怒りさえも十分に熟させようとはせず、苦境を生きぬく民衆の生命力を信頼し称賛するという形でこの小説を閉じているのである。

さて、それでは1930年代に於ける Steinbeck のこのような態度、即ち民

衆の生命力に全幅の信頼を置きながら一定の距離を保って見守るという態度を説明するものは何であろうか。それには、Steinbeck のいわゆる「生物学的人間観」と、彼自ら言うところの「非目的論的思考」とに触れておく必要がある。

まず、彼の「生物学的人間観」なるものを簡単に紹介してみる。それは、彼自身の生物学への深い関心と、さらに彼の友人であり海洋生物学者である E. Ricketts とに負うところ大なるものであって、彼は人間を人間として理解する前にまず全生物界に属する一つの「種」として把握しようと試みるのである。

Perhaps we will have to inspect mankind as a species, not with our usual awe at how wonderful we are but with the cool and neutral attitude we reserve for all things save ourselves.²⁵

そして、彼は生物にとって最も基本的な問題は何よりも先ず 'survive' することであるとし、人間が生物の一つの「種」である以上、このことは人間とて例外ではないと考えるのである。Steinbeck のこのような人間観を最初に論じた E. Wilson は “Mr. Steinbeck almost always in his fiction is dealing with... humans so rudimentary that they are almost on the animal level.”²⁶ と言い、Steinbeck の描く人間はただ生命維持本能の支配によってのみ生きる人間であり、彼は人間を動物と同じレベルで扱うと述べている。が、とにかく、Steinbeck が *The Grapes of Wrath* で生命維持も困難な状態にある貧民を熱っぽく称えた根底には、こうした人間観が横たわっていることは確かである。

次に Steinbeck の傍観者の態度を説明するものとして、彼自ら言うところの「非目的論的思考」に触れてみる。「生物学的人間観」と同様この考え方もまた生物学と深い関係を持っており、生物の生態を観察する態度に酷似している。彼はこれを次のように説明する。

Non-teleological thinking concerns itself primarily not with what should be, or could be, or might be, but rather with what actually 'is'—attempting at most to answer the already sufficiently difficult questions *what* or *how* instead of *why*.²⁷

要するに、彼の言う「非目的論的思考」とは、事実をただあるがままに見ようとする極めて冷静にして客観的な態度を意味しており、これに忠実であろうとすれば、それは自然科学的で冷淡な態度を必要とする。しかしながら、Steinbeckはこの「非目的論」に徹しきれ程のリリアリストではない。彼は人間を一つの「種」と考え人間社会を「非目的論的」に眺めようとしながらも、本質的には、そこに希望と可能性を求めずにはいられないロマンティストである。従って、「生物学的人間観」と「非目的論的思考」とは彼特有の二つの特徴であることに変わりはないが、それをその言葉通りに受けとるべきではない。

さて、大恐慌の嵐もおさまりかけた1941年、アメリカは第二次大戦に突入した。この時に当たり、先年、*The Grapes of Wrath* によって大センセーションを巻き起こした Steinbeck のこと故、その行動に世間の注目が集まるのは当然である。1943年、彼はとうとう *New York Herald Tribune* の依頼を受け、その特派員としてヨーロッパ戦線に従軍することとなった。そして、その時の記録は後に1958年、*Once There Was a War* の題名で一冊の本として出版されたが、その内容はごく平凡なルポータージュに過ぎず彼の積極的な声は聞かれない。結局、彼は戦争にあって専ら「非目的論的」に見守ることに終始し、従軍の体験を踏えた本物の戦争小説は書かれずじまいであった。彼自ら "... I felt an interloper, and eavesdropper on the war, and was a little bit ashamed of being there at all."²⁸ と回想しているように、大戦に対する彼の関心は極めて弱く、それは所詮他人事に過ぎなかったのかもしれない。

大戦に対して専ら傍者観を決め込み従軍記者としての仕事もそこそこに

帰国した Steinbeck は、1944年、戦時下のアメリカにあって、およそ戦争とは縁遠い *Cannery Row* という作品を発表した。それは一見極めてたわいもない物語であるが、かつて M. Cowley が “poisoned cream puff”²⁹ と評したごとく、その根底には現代アメリカ社会に対する彼の鋭い批評精神という「毒」が潜んでいる。

それは、*Cannery Row* という文明社会からは全く隔絶した世界を舞台に、E. Ricketts をモデルにした Doc と、ぐうたらな人間 Mack とその仲間達が繰り広げる自由奔放な生活のドラマである。彼等はいずれもアメリカ文明社会機構からはみ出た落伍者であり敗北者である。しかし、彼等は文明社会の落伍者であるが故に文明の汚れを知らない。Steinbeck にとっては、彼等こそが純粋な真の人間性を留めた善人なのである。

All of our so-called successful men are sick men, with bad stomachs, and bad souls, but Mack and the boys are healthy and curiously clean. They can do what they want. They can satisfy their appetites without calling them something else.³⁰

しかし、彼等が自由奔放な生活を楽しめるというのも、文明から隔絶した *Cannery Row* というユートピアに住んでいるからに他ならず、彼等はいかに純粋で正直で親切な善人であろうとも、所詮は文明社会機構に適應できない存在であり、やがては滅びゆく運命にある人間達に過ぎない。次のような Doc の見解は明らかに「生物学的人間観」に立ったものであり、*Sea of Cortez* にみられる Steinbeck の意見と一致する。

The things we admire in men, kindness and generosity, openness, honesty, understanding, and feeling are the concomitants of failure in our system. And those traits we detest, sharpness, greed, acquisitiveness, meanness, egotism, and self-interest are the traits of success. And while men admire the quality of the first they

love the produce of the second.³¹

In an animal other than man we would replace the term 'good' with 'weak survival quotient' and the term 'bad' with 'strong survival quotient.'³²

生存競争の激しい生物界にあって 'good' であることは必然的に 'failure' につながり, 'success' に到達するにはどうしても 'bad' を必要とする。そして、このことは人間が生物の一つの「種」である以上人間とて例外ではない。しかし、人間には、他の生物と異なって、生来 'good' を愛し 'bad' を嫌う性向がある。が、にも拘らず、人は 'good' の産物である 'failure' を軽蔑し、'bad' の産物である 'success' を称賛するという "strange duality"³³ を持っている。Steinbeck はこの duality を "ethical paradox"³³ と説明し、他の生物と異なって善悪の意識を有する人間の宿命だと考えるのである。

Cannery Row に見られるように、1940年代の Steinbeck は商業主義に毒された現代アメリカ社会の醜さを批判することに新しい方向を示したと言える。彼はもはや社会悪に対しあから様に怒りをぶちまけようとはせず、社会から一步身を退いて、それを「非目的論的」に眺めながら批評し批判しようとする。そして、彼のこうした態度は、次作 *The Pearl*, *The Wayward Bus* に於いて、より明確な形をとって示される。即ち、*The Pearl* では真珠を象徴的に扱うことにより現代物質文明社会への拒否を示し、*The Wayward Bus* では文明社会に生きる人間を半ばカリカチュア的に描くことによって文明風刺を試みているのである。

が、しかし、同時に彼はアメリカに於いて今や完全に文明が勝利したことを認めない訳にはいかない。人はもはや文明に背を向けて生きていくことはできない。そして、文明がもたらす弱肉強食の非情な世界では、Mack 達のような 'innocent' で 'good' な人間が 'survive' する道は残されていない

いのであろうか。Steinbeck はここに他の動物とは異なり善と悪の意識を持つ人間の問題として “ethical paradox ”を提起し、そこに救いを求めようとするのである。

〔Ⅳ〕 *East of Eden* の意義

East of Eden 13章に於いて、Steinbeck は現代が政治・経済・宗教その他あらゆる世界で完全に集団化してしまっていることを嘆き、人類の将来に一抹の懸念を懐きながらも、次のように人間個人の尊厳さを強調する。

And this I believe: that the free, exploring mind of the individual human is the most valuable thing in the world. And this I would fight for: the freedom of the mind to take any direction it wishes, undirected. And this I must fight against: any idea, religion or government which limits or destroys the individual.³⁴

現代文明社会がいかに集団化し、いかに機械化した社会であろうとも、それは、結局、人間個々人の集団に過ぎず、人類の将来は人間個人の自覚にかかっている。ここに到って、Steinbeck は人間を個人として把握することにより非情な文明社会の救いを人間個人の良心に求めようとする。即ち、彼は *East of Eden* に於いて、人間集団の外なる世界よりも人間個人の内なる世界を見つめようとしたのであり、社会現実よりもより多く人間性の現実を探ろうとしたのである。

The Grapes of Wrath の Steinbeck は、「生物学的人間観」に立ち、人間個人を ‘life unit’ と考えてその生命の尊厳さを訴えた。しかし、*East of Eden* の Steinbeck は、「人間のあらゆる物語は善と悪との物語である」と極言し、人間個人を「善と悪の網」に捕えられた存在として、即ち ‘moral unit’ として把握しようと試みる。これは、彼が人間の他の生物との相違点、他の生物に優位を占める点を人間の持つ善と悪の意識、

つまりモラル意識に認めたことを意味し、同時に「生物学的人間観」を放棄したことを意味している。

人間を ‘moral unit’ と考える Steinbeck は、20世紀のアメリカを舞台に現代の神話を展開し、現代に生きる人間を探究した。そして、彼が求めた人間は、善と悪の存在を認め、その葛藤に苦しみながらも善を選ばんとする人間 Cal である。Steinbeck が、*East of Eden* に、このように善と悪との両極を退け中間的な存在 Cal を求めたのは、「生物学的人間観」に伴う “ethical paradox” を考慮してのことであると考えられる。即ち、‘good’ な人間が ‘weak’ であり ‘bad’ な人間が ‘strong’ であるという生物としての人間の宿命を認めた上で、なおも ‘good’ な人間に ‘survive’ する道を残さんとする彼の苦肉の折衷策であると推測されるのである。そして、もしこれを “ethical paradox” の解決とみなすならば、それはあまりにも通俗的であまりにも安易な解決であり「さとうづけのモラル」であるという非難を免れないかもしれない。だが、しかし、我々はそれが Steinbeck の人間性に対する揺ぎない信頼を踏まえたものであるということにより多くの注目を払うべきである。

‘*timshe!*’ というヘブライ語に彼独自の解釈を施し、原罪のメカニズムからの人間解放を試みた Steinbeck は、一たん悪の道に足を踏み入れ罪を犯した人間にも罪を治め善なる道を求める可能性を与え、罪の克服を人間の選択の問題であるとする。つまり、善と悪とを判別しその選択をする権利こそが、他のあらゆる生物に対して優位を占める人間の特権なのだと言主張するのである。

It is easy out of laziness, out of weakness, to throw oneself into the lap of the deity, saying, ‘I couldn’t help it; the way was set.’
But think of the glory of the choice! That makes a man a man.
A cat has no choice, a bee must make honey. There’s no godliness there.

では、Steinbeck のいうように、人間各自にその自由意志に従って善と悪とを選ぶ権利があるとすれば、何故に人は、現実には、しばしば悪に翻弄され、人間社会に悪事の絶えることがないのか。彼はここに「愛」の問題を提起するのである。

人は誰でも善良でありたいと欲し愛されたいと願うものである。そして、人がしばしば悪の道に陥り罪を犯すのも、この愛されたいと願う心が受け入れられず理解されないことに原因する。このことは「人間の魂を象徴する物語」である Cain と Abel の物語に象徴的に語られている。Cain が Abel を殺し神に謀反を企てたのは、Abel が神の気に入る愛されたのに反し、Cain の方は愛されず顧みられなかったからである。また、Trask 家の Cal が間接的ながら Aron を死へと追いやる羽目になったのも、父 Adam の Aron への偏愛に対する彼の嫉妬心から生じたことである。

このように、Steinbeck は人間の犯す悪事でさえも他人から愛されたいと願う心から生じたものであるとし、人間本来の善良さを信じるのである。そして、悪はどんなに人の世に栄えようともそれは常に散発的であり、それにひきかえ、人間の魂に宿る倫理は永遠であり不滅であるとする次の言葉は *East of Eden* の主旨を最も簡潔に、かつ最も明瞭に物語っている。

... evil must constantly respawn, while good, while virtue, is immortal. Vice has always a new fresh young face, while virtue is venerable as nothing else in the world is.³⁶

このように見てくると、*East of Eden* という作品は、結局のところ、Steinbeck の人間性に対する絶対的な信頼の吐露であり確認であると言える。勿論、彼の全ての作品には、「非目的論」と「生物学的人間観」という二つのヴェイルに覆れながらも、そこには一貫して人間信頼とヒューマニズムの精神が流れていることは確かである。もっとも、それは時として

センチメンタリズムに陥る危険性を孕んではいるけれども、この精神こそが Steinbeck 文学の根幹であることに疑いはない。そして、*East of Eden* の Steinbeck は、この「非目的論」と「生物学的人間観」というグエイルを脱いで、その本心を、即ち人間信頼を正直にぶちまけたのであり、この作品を 'lifework' にせんと意図したのもこの意味に於いてであろう。

East of Eden が一個の独立した文学作品としては、多くの批評家の指摘するように、あまりにも欠陥多いことは否定できない。が、しかし、これを Steinbeck との関連に於いてとらえ、また彼の他の作品系列の中に置いて眺める時、これ程に Steinbeck の人柄と思想を明確に物語る作品は他に見当たらない。それは正に、彼自ら一つの箱にたとえて "Well, here is a box. Nearly everything I have is in it, and it is not full."³⁷ と述べているように、彼の持つ重要な要素のほとんど全てが詰め込まれていながらも、未だ混沌として整理不十分な「箱」なのである。*East of Eden* の意義それは作品としての価値よりも、むしろそれが Steinbeck という一人の人間を最もよく語っているという点に求められるのではなかろうか。

注

1. P. Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1958) P. 275.
2. 最近刊の L. G. Marks, *Thematic Design in the Novels of John Steinbeck* (The Hague: Mouton, 1969), PP. 114—131. ではかなり積極的な *East of Eden* 評価がなされているのは注目される。
3. W. French, *John Steinbeck* (New York: Twayne, 1961), P. 152.
4. A. W. Litz, (ed.), *Modern American Fiction* (New York: Oxford University Press, 1963), P. 273.

5. F. W. Watt, *Steinbeck* (Edinburgh : Oliver & Boyd, 1962), P. 93.
6. J. Steinbeck, *East of Eden* (New York : Bantam Books), P. 366.
7. *Ibid.*, P. 10.
8. *Ibid.*, P. 240.
9. S. Cooperman, *Review Notes and Study Guide to Steinbeck* (New York : Monarch Press, 1964), P. 91.
10. *East of Eden*, P. 269.
11. J. Fontenrose, *John Steinbeck* (New York : Barnes & Noble, 1963), P. 123.
12. *East of Eden*, P. 392.
13. P. Lisca, *op. cit.*, P. 262.
14. J. Steinbeck, *Journal of a Novel: The East of Eden Letters* (New York, The Viking Press, 1969) P. 104.
15. P. Lisca, *op. cit.*, P. 73.
16. 尚この点に関して Steinbeck 自身は *Journal of a Novel*, P. 180に於いて, "I have written about one family and used stories about another family as well as counterpoint, as rest, as contrast in pace and color." と述べている。
17. *East of Eden*, P. 131.
18. J. Fontenrose, *op. cit.*, P. 126.
19. *East of Eden*, P. 63.
20. *Ibid.*, P. 62.
21. F. W. Watt, *op. cit.*, P. 97.
22. S. Cooperman, *op. cit.*, P. 91.
23. J. Steinbeck, *In Dubious Battle* (New York : Bantam Books), P. 103.
24. J. Steinbeck, *The Grapes of Wrath* (New York : Bantam

- Books), P. 127.
25. J. Steinbeck, *America and Americans* (New York : Bantam Books), P. 168.
 26. E. Wilson, *Classics and Commercials* (New York : The Noonday Press, 1967), P. 36.
 27. J. Steinbeck, *The Log from the Sea of Cortez* (London : Pan Books), P. 193.
 28. J. Steinbeck, *Once There Was a War* (New York : Bantam Books), P. X.
 29. E. W. Tedlock, Jr., and C. V. Wicker, (eds.) *Steinbeck and His critics* (Albuquerque : University of New Mexico Press, 1957). P. 276.
 30. J. Steinbeck, *Of Mice and Men & Cannery Row* (Penguin Books), P. 186.
 31. *Ibid.*, PP. 187—8.
 32. *The Log from the Sea of Cortez*, P. 156.
 33. *Loc. cit.*
 34. *East of Eden*, P. 114.
 35. *Ibid.*, PP. 269—70.
 36. *Ibid.*, P. 368.
 37. *East of Eden* 巻頭にある Pascal Covici への献辞。